⑦ つつじ野　8Kアニメ　11/17

東日本大震災で3人の子どもを亡くした渡波の遠藤さん一家の悲劇については、新聞報道で目にした方も多いのではないか。石巻市渡波に住んでいた木工作家の遠藤伸一さんの一家は、妻の綾子さん、長女の中学1年生・花さん(13)、長男の小学4年生・侃太君(10)、次女の小学2年生・奏さん(8)の5人家族。あの日、遠藤さん夫妻は外出中で、学校から帰宅していた3人の子どもは海から300㍍しか離れていない自宅ごと津波に流され、3人とも亡くなった。遠藤さんの自宅跡には木製の大型遊具と海の方を向いた3体の小さな地蔵人形が残されている。

遠藤さん一家の悲劇を知ったNHK時代の後輩でNHKメディアテクノロジーの北川恵君が8Kのアニメ作品にすることを思い立ち、2016年6月、私に相談してきた。地元の同期生、渋谷純氏が遠藤さんと知り合いだったことが判り、3人で東松島市の遠藤さんの工房を訪ねアニメ制作の承諾を得た。

8Kというのは「超高精細画像システム」のことで、画素数が今のハイビジョンTVの16倍。究極の超臨場感をもたらす最先端のTVで18年12月には実用化放送が始まる。

北川君らは震災前の遠藤さんの自宅や工房を精密に再現。和紙で作った遠藤さん一家の人形や小道具の質感を繊細に表現した8K映像を駆使し、4カ月かけて6分間のアニメを完成させた。北川君は津波のシーンが一切出てこない作品にしたかったということで、いまも遠藤さん夫妻の心に深く残る一家の何げない日常を心温まる作品に仕上げた。

8Kアニメ「あの日まで」の石巻での上映会は17年9月23日と24日の2日間、かほくホールで1回30分、11回開催された。遠藤さんは会場で「普段のごく普通の日常の幸せを大切にしてほしい」と訴えた。上映会は東京や長野、熊本などでも開催されている。この作品は10月、アメリカで開かれた国際アニメ映画祭のプロフェッショナル・ストップモーション部門で3位に選出された。被災地支援は形を変えて今も続いている。

（佐藤悠　元石巻支援三七会代表　相模原市南区）

⑧ つつじ野　ふるさと応援団　11/24

石巻支援三七会の活動を終えて1年8カ月がたった。支援活動に取り組んだ5年間は、ほぼ1か月おきに石巻に通っていたこともあって、市内の至る所がガレキに覆われた震災直後の状況から復旧、復興へと向かうふるさとの姿をつぶさに見ることができた。

また、2005年に石巻市と合併した地域をはじめ、石巻地方の広い範囲を動き回り、多くの人たちと出会ってさまざまな話をすることができたことで、「これまで知らなかった石巻」を知る機会にも恵まれた。北上川河口のヨシ原の話はその典型で、お恥ずかしい話だが、支援活動に携わるまではその存在を全く知らなかった。

考えてみれば石巻で生まれて育ったとはいえ高校卒業後は石巻を離れて東京など他の地域で暮らした時間が圧倒的に長く、石巻に関する基本知識は行動半径が限られていた50年前のままだった。その意味では未曽有の災害がきっかけとはいえ、支援活動に取り組んだ5年間は私にとって文字通り〝ふるさと発見〟の5年間でもあった。

被災地の復興は着実に進んでおり、石巻でも街の姿が随分変わってきた。しかし人口減少が続く中で、「震災復興は新たな地域社会の構築」（東日本大震災復興基本法・11年6月制定）とあるように、被災地が地域社会を再構築し、日本の未来を照らし出すような地域として「再生」していくことができるかどうかは、むしろこれからが正念場と言えるのではないか。

私は現在、石巻地方の活性化や振興に貢献していくことを目指す「東京みやぎ石巻圏人会」と「東京鰐陵会」（宮城県石巻高等学校同窓会東京支部）に所属しており、会の活動やメンバーを通じて石巻地方のさまざまな情報を耳にする機会も少なくない。

古希を過ぎた私にできることは限られているが、これからも〝ふるさと応援団〟として石巻地方を見つめ、新たな地域社会の構築に向けて少しでも手助けになるような支援を続けていくことができればと考えている。

（佐藤悠　元石巻支援三七会代表　相模原市南区）